



大川端 リバーシティ21の商業施設 レストラン

松野 フランスでは再開発の場合、重要な場所に必ず花屋さんを安い家賃で呼びこむのだそうですね。そうするとまちが華やかになる、人も集まってくる、これからは店舗もガッチリとした恒久の構造物でなく、仮設でもいいし、場所によっては屋台でも構わないという発想を持つべきでしょう。

隈 商業施設の導入の考え方が間違っているのです。ハードを立派にするから高いコストになり、テナントに負担を強めます。だから応募できるテナントはどこでも決まってしまう。テナントは家賃で寄与するのではなく、まちの魅力づくりに寄与するものという考え方でなければなりません。

三浦 新旧の職人さんの琴線に触れるまちが欲しいですね。伝統的な技を持つ職人さんが、今もモノづくりを通して生活に溶け込んでいます。

隈 昔の同潤会のアパートは片廊下の幅が広くとってあるんです。職人さんの仕事場なんですね。生活が建物のデザインを生み出しています。

三浦 東雲の商業施設の計画では、下町の職人さんたちを集める大きな工房、江戸職人村を提案したことがあります。

隈 東雲には今風の職人(笑)カメラマンやデザイナーが住んでいて、海外からの視察にいつもの確に対応してくれず。彼らにとって家は自分のショールームです。いま妻が片付けますからちよっと待って(笑)ということがない。



豪華客船も発着 いち早く整備された晴海客船ターミナル

三浦 これからの東京臨海部のグランドデザインの可能性はどうでしょうか。

隈 広大な空間ですから、とりまとめるにはグランドデザインが欠かせないでしょう。例えば水上交通ネットワークの形成とか、建物の低層部での仮設性の提示をするとか、生活の根幹の部分でほかの都市と違った思い切ったライフスタイル

まちづくりにも 可変性と柔軟性を

隈 ビビットな文化は仮設建築が一番よく見せることができます。いま流行のレストランだけ並ぶのは文化のプレゼンテーションではないのです。

三浦 冒頭お話しした文化のプレゼンテーションの場にもなりますね。

隈 まちは変わっていくものですから店も新陳代謝をしやすいほうがいい。



植栽が水辺に映える 石川島公園 大川端リバーシティ21



パブリックアートも街を彩る リバーパーク 大川端リバーシティ21

隈 一方で極限なまでのクリーンとセキュリティのニーズがあつて、住居は閉じる方向に向かっています。一方でウェットな人間関係のある開かれた暮らし、これは二律背反です。アメリカは一方的に閉じる方向で進んでいますが、日本が求めているのはもっと曖昧でウェットなものです。アメリカのライフスタイルを世界で追っかけたのが20世紀ですが、それからの脱却は今世紀のテーマでしょう。都市の暮らしは複合的で、ある種の猥雑さも許容しなければならぬ、日本も目覚めつつある。

三浦 生活の中のモノづくりを垣間見られるということが大事でしょう。いまは防犯、防災が優先して、住まいが密室化している、まわりの人の暮らしと分断されてしまう。

隈 住宅行政を担当している時、防犯について国会議員に勉強会に呼ばれたんです。ニューヨークではアパートには門番を置いている、日本でもそれを義務づけて建築規制をしたらどうかというんです。そんなことをしたら門番のいない時間は違反建築になる(笑)。つきつめればセキュリティとコミュニティというのは相反することで難しいでしょうが、もう少し多くの人の目がまちの暮らしのなかに注がれる必要があるでしょうね。



ホテルやオフィス 伊豆七島方面の客船のターミナルが並ぶ竹芝ふ頭

三浦 もともと下町には長屋文化の歴史がありましたよね。今の子供たちにかつての都市の風景と暮らしの歴史をどう伝えていけるでしょうか。

昔の時間を 味方につける

松野 住宅行政を担当している時、防犯について国会議員に勉強会に呼ばれたんです。ニューヨークではアパートには門番を置いている、日本でもそれを義務づけて建築規制をしたらどうかというんです。そんなことをしたら門番のいない時間は違反建築になる(笑)。つきつめればセキュリティとコミュニティというのは相反することで難しいでしょうが、もう少し多くの人の目がまちの暮らしのなかに注がれる必要があるでしょうね。



竹芝のウォーキングデッキから 勝鬃橋 大川端 リバーシティ21を望む



整備された水辺の風景 対岸はまだ川に背を向けている 大川端リバーサイド21

す。都市機構は、公共施設をつくる権限もありませんし、敷地の整備もやらなくてはならない、パワーもあり信頼もいただいていて、それだけ期待も高いのです。コーディネーターの役割ですから、多くの方に知恵と力を発揮していただき、こ

松野 都市機構は大川端、お台場、晴海トリートメントスクエア、東雲などに関わってきたのですが、臨海部は建物をつくるのではなく、まちをつくりかえる、土地柄そのものを変えていく事業です。都市機構をつくる権限もありませんし、敷地の整備もやらなくてはならない、パワーもあり信頼もいただいていて、それだけ期待も高いのです。コーディネーターの役割ですから、多くの方に知恵と力を発揮していただき、こ



縮尺1,000分の1の大模型を前に

隈 いろいろな時間は並立して流れています。例えば商業施設は2、3年で生まれ変わる昆虫のような時間、公共施設は何十年生きる動物のような時間、インフラは何千年という単位の鉱物のような時間ですね。いままでは全部時間同じに考えていましたが、これからはそれぞれの時間に合ったデザインが必要で、都市は時間によって変貌していくという考え方が最も大事になるでしょうね。

の大きな空間でできる限りのことをやっていたい、なんといってもここは都市機構の宝庫です(笑)。ただグランドデザインは私たちだけではできません。行政や地権者のみなさんともどもにすすめていきたいと考えています。10年20年先を見通すのは困難ですが、基本になることは、都市のインフラはきっちり整える、しかし土地利用は柔軟にする、世の中変わっていきますから、いつでも変われるようにしておくことでしょう。

三浦 商業は計画者のイメージには収ま

松野 月島の開発では昔ながらの路地を広げるとまちが駄目になる、まちなみとしてあの空間としての適度の緊張感と情感を保つために、中央区は新しい制度を作って対応しました。どうも東京は都心でも郊外でも電車の窓から見ると行ってみると思う建物が少ない、なかに入るとそれなりにきらびやかで面白いにも拘わらず、まちの楽しさが外に表現されていないのです。先ほどの様々な分野の人たちのチームに期待したいです。



水際線はまだ無表情ながら スカイラインは迫力を増してきた 隅田川の表情